



寓言

フォークナー作
阿部知二訳

岩波書店

フォークナー 寓 話

1960年10月31日 第1刷発行 ©

〒480

1961年1月20日 第3刷発行

訳 者 あ べ とも じ
 阿 部 知 二

発 行 者 岩 波 雄 二 郎

東京都千代田区神田一ツ橋 2ノ3

発 行 所 株 式 岩 波 書 店
 会 社

落丁本・乱丁本はお取替いたします 精興社印刷・桂川製本

わたくしの娘
ジルに

深甚な感謝を下記の人々にささげる。すなわちカリフォルニア、
ビヴァリ・ヒルのウィリアム・ベイチャとヘンリ・ハサウェイとの
創意を基として、この書は現在のかたちに成長したのであり、ジェ
イムズ・ストリートの書「展望」に、私は絞首刑囚と小鳥との物語
を読み、またレヴィー・ブレスのホディング・カータとベン・ウォ
スンとは、限定版として盗まれた馬の物語の原典を世に出したので
あった。

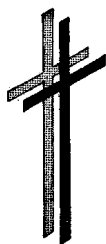
W・F

寓

話

一章

水曜日



市内の兵舎や郊外の宿営地からの起床ラッパがなりひびくはるか前の時刻に、多くの市民たちは、すでに起きていた。彼らは、蜂の巣のように密集した共同住宅の、わらぶとんやうすい寢床から身を起す必要がなかった、というのは、子供たちのほかは、体を横にすることすらもしていなかった。彼らは、寝るどころではなく、恐怖と不安とおののく声なき一大集団となつて、やがて闇がついにしりぞいて、さらに不安と恐怖との一日がはじまるまでの夜とおし、火鉢や煖炉の弱々しい火のまわりに寄りそっていたのだ。

部隊についていえば、その創建において地方で募集されたのであり、後にナポレオン麾下の元帥にまで昇進したかがやかしい悪党どもの一人が、自から徴募に当つたのであり、彼はその連隊を皇帝自身の手に渡し、それによって、彼は、いわば空の半ばを凶兆でみたし、地上の半ばをその電光で枯らしてしまつた星座の中の、もっとも恐るべき星の一つにのし上つて行つたのであつた。さらに、この連隊の補充兵も、ほとんどこの同じ地方から選びだされたのであつたから、この地の老人連はかつての古参兵どもであり、その倅^{せがれ}たちはいつかの日にはその隊に捧げられるべきものであつたばかりでなく、この地のすべての住民は、親や身内——そのむごい運命を背負つた男たちのじっさいの親か身内であつたばかりではなく、よほどの途方もない幸運にめぐまれぬかぎり、自分たちの息子や兄弟や夫や父や情人を、そのむごい運

命を背負う男たちの中に持つものたちの、父や母や姉妹や妻や情人たちであった。

まだラッパのひびきが消え去らぬまに、養兎場のように人間がうようよ住んでいる細民窟は、もうその人間たちを吐きだしはじめていた。この光景は、フランスカイギリスかアメリカかの飛行士が（あるいは大胆で運のいい人間ならばドイツの飛行士であつてもかまわないが）空から一番よく見ることができたにちがいない。小屋からも長屋からも、路地へ、横丁へ、名もない袋小路へと吐きだされる人間は、ちょうど滴が集つて流れとなり、流れが集つて川となるように、路地や横丁や袋小路から町へ町へと進んでゆき、ついに全市民は本道に殺到するように見えたが、その本道は車の輻のように中央広場へと集中し、その広場もやがて一ぱいになると、こんどは一点に集つた群集は、集団自身の重みに押されて、後には戻れぬ波のように、市庁舎の何の飾りもない門の方まで押しよせて行つたのであつたが、そこには共同の戦争に入つた三国のめいめいから出された三人の歩哨が、旗をおろした旗竿の側に立つて、同盟の三つの旗があがるのを待つていた。

民衆は最初の軍隊に、ここで出会つた。それは、広場か

ら、昔の市区の東城壁の古城門までつづく幅広い中心街の入口を横切つてきた騎兵守備隊の一隊であつて、人波の先頭のざわめきが、すでに衛戍司令の寢室にきこえたかのようになつて、この時すでに持場について待機してゐた。しかし群集はこの騎兵隊には何の注意も払わなかつた。彼らは広場の中へと押し合いをして進みつけながら、その混乱する大集団自身の重みのために、のろくなつたり停止したりし、ただその集団の中で絶えずかすかに身うごきたり向きを変えたりしながら、のぼる太陽の光のなかで、市庁舎の扉を茫然と、そして我慢よく見つめていた。

その時、朝の号砲が、市街を見おろす旧城塞からひびいた。するとどこからともなく三つの旗が一斉にとびだし、三本の旗竿をのぼつて行つた。旗が飛び出し、よじのぼりのぼりつめたところは、まだしばらく動こうともしない暁闇の空だつた。しかし、最初の朝風にうごいた時、旗は太陽の光に向つてひるがえり、たがいに調和をもつ三つの色——勇氣と誇りとは赤、潔白と誠実とは白、名譽と眞実とは青の三色を、陽の光の中に投げかけた。すると騎兵隊の後方の、だれもない街路に急に日光がさしこみ、外側にいた騎兵と馬との長い影が群集の上に落ち、それは

騎兵隊が彼らに襲いかかるような感じであった。

騎兵隊に向って前進していたのは、群集の側だけであった。その集団は静粛であった。それはほとんど秩序正しいもののようにもみえ、水滴がよりあつまってできた波のように、脆い構成分子が集って、抗いがたいまとまりをみせていた。しばらくのあいだ騎兵隊は——将校が一人いたようだが、特務曹長にまかせているらしくみえた——何の行動もおこさなかった。やがてその特務曹長が大きな声を出した。軍隊が動かないところを見ると、それは号令ではなかったらしい。まったく意味のないひびきでしかなく、解りにくく、弱い、わびしい声が、空中に消えてゆく瞬間に尾をひき、それは今時分、この都市の空高く飛びながら、姿を見せぬひばりの、かすかな、どこからともなくきこえてくる快い鳴声に似ていた。しかし彼のつぎの叫びは号令だった。だが、それはもう遅すぎた、というのは、群集はもはや軍隊の列を潜って前進していたのであり、その受身ではあるが打ちがちがたい忍従の中に、抑えがたい力を藏しながら、獅子のいる闘技場に入る殉難者のように、ほとんど無心に、つつましく、弱々しく、しかも傲然たる不敵さをもって、その脆い骨と肉とを蹄と剣とのるつぼの中に

投じていた。

つぎの瞬間、騎兵隊はとまった。その時ですら隊は乱れなかった。ただ、依然前向きになっていながら、まるで全体がもちあげられてしまったように、あとしざりしはじめた——手綱をひきしめられた馬の白くぎょろぎょろした眼、高くさしあげたサーベルの下で口を大きく開いてかすかな声をだした騎兵たちの高く小さく見える顔、すべてが後へ後へと退いて行ったのは、あたかも、甲冑武士像が、彼らの榮譽ある隠れ家というべき石の密室をこなごなに砕き去る洪水によって、崩れた宮殿や館や博物館から吐き出されるようであった。それから馬上の将校は自由な行動をとった。一瞬、彼だけが動いているようにみえたが、それは今まで彼だけが、その両側に分れて流れている群集の頭上にじっと動かずにいたからである。それから彼はじっさいに前進しはじめ、鉄の口輪をはめられ、手綱をしめられて静止していた馬を勢よく駆って、進んでくる群集の中にわけ入った。どこか馬の体の下の方と思われるあたりから、一度、叫び声がかきこえてきた——子供か女の声のようでもあったが、それとも恐怖か苦痛かのために、男が去勢者のような鋭い声を出したのかもしれない——彼がそれをきいた

のは、波が突進む船の舳^{きさき}を甘受するように、馬をうけいれ、何ら彼をさけようともしない人間の流れの中に、この動物をゆきぶり動かしながら前進している最中のことだった。やがて彼は姿を消した。群集は今や速度をまして街路に押しよせてきた。彼らは騎兵隊を払いのけてどしどし進み、大通にまじわる町々を通過する際は、大川が洪水の折に支流を併せてしまうように、これらの町々を抹殺し、ついにこの街路も、深い水をたたえて音もなくたぎる一つの潮水と化してしまった。

しかしその前に、歩兵部隊はすでに到着していたのであり、騎兵将校がこのことを日直将校に報告することができたのは、この歩兵部隊が群集の後方の中央広場を出発してからよほど後のことであつたが、もしその報告が早く入つておれば、日直将校は、伝令も出したであろう、従卒も呼びだしたであろう、入浴も副官のひげそりも中途でうち切つたであろう、ナイトキャップの内衛兵司令を起こしもしたのであろうし、城塞内の歩兵部隊司令官に電話でしらせるか、使いの兵を走らせもしたのであろう。この歩兵部隊は一個大隊全部で、荷馬以外はすべて武装し、中央広場から閉縮行進縦隊をくんで、戦闘準備のため装甲面をおろした軽

戦車に導かれて進んできたのであり、その戦車は前進するにつれ、除雪車のように群集を押しわけたが、割ってかき分けられた人々を、歩道の縁石の後に除雪車でごちゃまぜにされる雪のかたまりのように、両側に押し返し、一方で歩兵部隊は、前進する戦車の後方に二列縦隊に開いて進み、ついに広場から古城門にいたる街路全体は、相つらなる銃剣つき小銃のうすい二つの列の間に、くっきりとした空白をつくった。かすかな動揺が、銃剣の堤防の後方の一点からおこつたが、しかしその範囲は十フィートたらずで、それ以上にはひろがらず、今何ごとかがおこっているのか、それともおこつた後なのか、そばの人たちしか知らなかった。そこで小隊付下士官は、銃剣の列の下に身をかがめ、肩でおしわけてその中に入つてみたが、やはり大したもののはみられず、ただ、一人の若い女、といつても小娘が、薄着のひどいみなりで氣を失つていた。倒れたまま横たわつていて、長い道程をほとんど徒歩か農家の車かできたのであろうが、旅で汚れた貧しいぼろの一束のように、彼女が倒れるために、あるいは死ぬために——それが彼女の目的だったかも知れないが——人々が開けてくれた墓石形の狭小な空間にころがっており、そして彼女がまっすぐに立つ

て呼吸できる余地をどうしても作ってやろうとしないまわりの人間たちは、よくあることだが、だれかが最初に動きだすまでは、静かに彼女を見おろしながら立ちつづけていた。軍曹が、その最初の行動をとったのであった。

「せめておこしてやれ」と荒々しく彼はどなった。「おきあがらせて、この町からどこか踏みつぶされんところに連れだしてやれ」一人の男がその時進み出たが、その男と軍曹とが身をかがめた時、女は眼をあけた。軍曹が、荒々しくではなく、ただ、一般地方人がいつも事柄を愚かしく複雑にする馬鹿さ加減に對して、また、捨ててきた部署に彼が戻ることを不可能にしている馬鹿さに特に、我慢がならぬという風に、彼女を強くひっぱって立たせようと試みた時、女は自から進んで立ちあがろうとさえした。「この女はどここのやつなんだろう」と彼はつぶやいた。何の答もなく、ただ、静かな注意深い多くの顔が見えるばかりだった。彼は最初から別に何の期待もしていなかった。彼は、よしだれかが彼女の世話を申し出たとしても、彼女を群集のなかから引きだすことの不可能なことは分っていたようであったが、とにかく、さっきからあたりを見まわしていたのであった。彼はふたたび女に眼をやり、こんどは彼女

に向って何かいおうとしたが、腹立たしく、ぐっと感情を殺し、口をひらくことをやめた。——四十歳のずんぐりした男で、シシリ島の盜賊のような口ひげを生やし、その上衣には、三大陸と二半球とにわたる従軍と戦闘との徽章の綬（リボン）をつけていたのだが、彼の属する民族の背丈は、かつてシーザがイタリア人の背丈をちぢめ、ハンニバルが彼の栄光の下積みとなった無名の台石彫像どもの丈をつめたのと同様に、百年前にナポレオンが二、三インチこれをちぢめたのであった——もし彼とバリの市場（いもば）とが、こことは別の舞台に引きだされるのであれば、彼はさしずめバリの市場の酒樽管理人になるべき（多分なり得たであろうし、なりたかったであろう）身の、夫であり父親であったにちがいない。彼はまたもや、まわりの氣長な顔をちらと見た。

「だれも——」

「この女はひもじいのです」と一つの声がいった。

「よし」と軍曹は応じた。「だれか——」しかし手がすでにパンをさし出していた。それはパンの切れはしで、それまでポケットに入っていたので、汚れていて、多少ぬくもってさえた。軍曹はそれを手にとった。しかし、それを女に与えようとすると、女はすばやく断ったが、その顔

に何か恐怖の色をみせて、全くすばやくあたりを見まわし、その眼は逃げみちを探しているかのようにであった。軍曹はそのパンを女の手の中にむりに押しこんだ。「さあ」と彼はきつくいったが、しかしその荒々しさは不親切なのではなく、ただ、じれったかったのだ。「食え。きさまはここにいて、いやでも彼の顔を見ねばならんのだ」

だが、女はまたもパンを拒絶したが、それは贈られたことへの拒絶ではなくてパンそのものを拒んだのであり、与えた何びとかをではなく自分自身を拒んだのであった。彼女はパンから眼をそらそうとしても、それができないことを承知しているようにも見えた。まわりの人々が彼女をじっとみつめている間でさえ、彼女は打ち負けて行った。彼女の眼というよりも全身は、口がパンを拒絶することに反対で、その眼はずっと前からこれを貪りながめていたのだが、ついにそれを取ろうとして手がのび、しかも軍曹の手からひったくって、これを強奪しようとするものにはかくすように、また彼女をじっと見ている人々には、がつがつするのを見せまいとするように、顔の前に両手ですくうようにそれを持ち、その眼光を、たえず蔽いかくしている手のあいだから閃めかせながら、齧歯類動物のようにパン

をかじっていたが、それは、完全に人に隠そうとしているのでも、絶対に秘密にしようとしているのでもなく、ただ不安であり、警戒的で、おびえている様子であった——その特性は、彼女が息をふきかける炭火のように、燃えては衰え、ふたたび赤く燃えるという風であった。しかし、彼女はもはやすっかり元気になったので、軍曹も立ち去ろうとしたその時、前にきいたと同じ声がふたたびひびいた。

疑いもなく、それはパンを与えた手の持主の声であり、軍曹も今それと気づいたのだが、その素振りは見せなかった。しかし、軍曹が、今はっきりと気づいたことは、その顔は決して、今のこの時、この土地の、——一九一八年、五月末の今日なりいつたりの水曜日、フランスというだけではなく、西部戦線から四十軒の地点にある顔ではなかったが、

——その男はじっさいに若いのでなく、ただ見たところが若いのであり、これは単に彼の立っている所のまわりにいる人々と、いちじるしく異っていただけでなく（彼はきわめて背が高く、きわめてけだかつたので、人々を抜き出していたといっている）彼は道路工夫が左官のように、色あせた上っぱりと、地の粗いズボンとを身につけていたが、いきいきとして端然として、いかにもゆったりと立ってお

り、この人間が、この日、地上のこの場所に存在し得たのは、この頃から約四年前の八月五日以来傷病兵として、無事に、安全に、また永久に兵役免除となったからこそであったにちがひなく、しかもこの男はそれが事実にしても、それを告げようとはせず、軍曹がそのことに気づくか思出すかしても、彼がそうだったということを、ちらとその眼にあらわしただけであつた。はじめこの男が口をきいたが、それはたしかに軍曹に向つて話しかけたのであつて、こんどこそ、軍曹はそのことに疑いをいだかなかつた。

「だが、あの女はパンを食い終えた」とその男はつぶやいた。「あのパン屑によつて、自分の苦悶から免れることができたはずではないですか？」

じつは、その声、そのつぶやきがひきとめた時、軍曹はそっぽを向き、すでに行動に移つていたのだが、——そのつぶやきはおだやかというよりも、きわめて気品にみちみち、おずおずとしているというよりも柔和であり、また何よりも天真であつたので、彼が振り向こうところみる前の休止の瞬間の、その束の間にも、沈黙していた注意深いすべての顔が、彼も話し手も見ないで、彼らの中間にはさまる空間にその男の声が創りだしたところの無形の何ものかを

見守っているのを、彼は見ることに、または感じるべきであつた。そこで軍曹もまたそれを見た。それはその男が身にまとつていた布であつた。軍曹は身体の向きをかえて、物をいつたその男だけでなく周囲のすべての顔に眼をやつたが、この時彼が感じたことというのは、彼は一種の、耐えがたい、長期の、全知の苦惱と、あまりに久しく耐えて慣れてしまつたために、たまたまこれを想いおこそうとすると、もはや悔恨ですらなくなつて悲しみとによつて、二十年前にその生涯のみでなく血肉そのものをも、捧げた、というよりも引き渡してしまつたところの、使命と生活との越えがたい障壁の彼岸から、今しも全人類を眺めているように感じられたのであり、また彼のまわりにもまるく環になつてゐる人たちの、静かに見つめる顔はすべて、かすかながら、底深い地平線の色を映して青みをおびてゐるようにも思われた。じつさいいつもそのようであつたのだが、ただその色合いが變つたのだ——砂漠と熱帯との褐色と白と、古い軍服の、毒々しく濃い赤と青と、それに三年前から現在のカメレオンのような空色が加わつたわけだ。彼ははじめからそのことを予期していた。いや予期していたというよりは受容したのであり、彼は意志と飢

の恐れと決定権とを放棄し、地位と權利とのために一日はんのいく錢かを支払われるまでになり、服従と、おのれの弱脆い骨肉を危険にさらし、またおのれの自然の欲望を永久の免罪の危険にさらすという犠牲とを払ったのである。

それゆえに、これまでの二十年の間、彼は一般世間の名もない住民たちを、おなきけにも何の權利もないよそ者として、輕蔑しながら、おのれの争いがたい優越の孤絶の点から見おろしていたのであり、彼とその密接に結ばれ握り合つた同僚とは、勇氣と忍耐との堅い同志感をもちながら、その袖章と線章と星とリボンとの船首を、軍艦のごとく（二年前からは戦車）にかかげて、魚群の間をすどくかき分けて進んだのである。しかし、いま何ごとかがおこつた。

そこに待ちうけている人々の顔を見渡した時（すべての顔は彼を待ちうけていたようだが、その若い女だけは例外だった。彼女ひとりだけは、彼を見守っておらず、パンの切れはしの先は、嚙んでいる顔に向けて、彼女のやせて汚れて、すくうような形にした両手のあいだに依然おかれている。それゆえ風も通らない狭いかこみの中に立っているように思われたのは、彼一人だけではなくて、彼と、この身寄りもない無名の娘との二人であつた）彼は一種の恐怖に

おそわれるように感じた。それはよそ者であるのは彼自身のことと、単によそ者というよりも、癡人になつてしまつたという恐怖であつた。また、二十年前のその日に、彼の上衣の戦塵に汚れた胸に、勇氣と忍耐と忠節と、肉体的苦痛と犠牲とを象徴する、戦争汚れのした、キャンデイのような袖章をつける權利と機会とのための報酬として、人間として生れながらもつてゐる權利を売ってしまったということに対する恐怖でもあつた。だが、彼はそれを表わさなかつた。キャンデイのような袖章そのものは、彼がそれをなし得なかつた証拠であり、彼がそれを服に付けていることは、それを望まないことの証明であつた。

「で、それから？」と彼はきいた。

「それは連隊全部のことでした」と背の高い男は、つぶやくようだが男性的な、やわらかで、ほとんど歌っているような上低音で、夢みるように答えた。「連隊全部でした。作戦開始の予定時刻がきても、將校とわずかの下士官のほか、だれも塹壕を出なかつた。それでいいじゃないですか？」

「で、それから？」と軍曹はふたたびきいた。

「なぜドイツ兵が攻めてこなかつたのかって？」とこの

のっぽの男はいった。「こっちが攻めてゆかないこと、つまり攻撃に何か故障がおこったことが分ったからではないですか。彈幕射撃の用意もよし、移動彈幕射撃の準備もできましたが、ただ、それが晴れあがって攻撃開始の時刻がきて、分隊長たちが壕から這い出ただけで、兵隊は出てこないじゃありませんか。ドイツ兵はその状況を見たにちがいないでしょう？ もしあんたが四年ものあいだ、わずか千米しか離れていない戦線に面していたら、攻撃開始に失敗するのを見ることができるとしようし、それがなぜかも多分分るでしょう。そしてそれは彈幕のせいなんですよ。つまりそのために壕からまっ先に出て攻撃することになるんです。どっちかの砲撃をさけて壕を出る——時には友軍の砲撃を」

軍曹はこの背の高い男だけをじっとみつめた。他のものたちのことは、感じとることができたので見るにも及ばなかった——他のものたちは、静かに注意深く、息をつめた顔で、きき耳をたて、何一つ見逃すまいとしていたのだ。

「陸軍元帥よ」と軍曹はにがにがしい嘲笑的な声でいった。「その君の軍服をもうだれかが調べる時期かもしれん」彼は手をさしのべた。「さあ、見せてもらおう」

長身の男はしばらく彼を静かにおだやかに見おろした。それから彼の手は上っぱりの下かどこかにもぐったが、すぐに現れて書類をひろげた。それは一回たたんであり、しみがついたり汚れたり、折目の隅がよじれていたりした。軍曹はそれを取りあげて開いた。だが、その時にも彼は書類を読んでいるようにはみえず、むしろそのまなざしは、あたりの静かにじっとみつめている人々の顔の上を走るばかりだった。一方背の高い男は、落着いた期待の面持で相変らず彼を見おろしていたが、つぎにまた、かすかで、静かな、ほとんどぼんやりしたささやきでいった。

「そして昨日の正午、われわれ前線部隊は全部戦をやめたんです。一万メートルごとにある各砲兵陣地に砲一門という申訳だけの砲兵を残しただけです。それから十五時には英軍も、米軍もやはりやめてしまい、そして全部が静かになると独軍も同様のことをやるのがきき取れたんです。その結果昨日の夕方までに、フランスには一切砲火はなくなり、ただやむを得ず残したのは例の名目だけのものですが、それも四年間も戦争がつづいた後で人類の上に突如として天から降ったその沈黙は、やがてこれをもなくするでしょう——」手早く一挙に、軍曹はその書類を折りたた

み、男の方に手をのばしてそれを返した、いやことさらにそうしたのは、その男が手をのばしてそれを受けとるまでは、軍曹は彼の上っぱりの胸を書類のしわや粗い布をまるめたもののように、しっかり掴んだり、ねじったりして、じっさいに動いたのはそののっぽの男ではなくて軍曹だったが、その山賊のような顔は相手の顔にくつつくばかりで、くさって変色した歯をむきだして物をいおうとしたが、一方の男が、例のおだやかな、ゆっくりしたつぶやきで依然語りつづけているので、彼はやはり何もいわなかった。「そして今グラニョン師団長は彼らの全部をここにつれてこさせて、最高司令官に彼らの射殺を許すよう要請しようとしているんです。何の予告もなしに、あの大きな平和と静かさが人類の上に落ちてきたので——」

「元帥でも」と軍曹は、はげしい沸き立つような声で口ばしした。「弁護はできませんい」彼は荒く、はげしい口調でつぶやいた、といっても、決してもう一人の男より大きい声を出したわけではなかった。まわりの人々の静かな注意深い顔は、その男の話していた時とか、あの若い女が話していた時と同様、軍曹のつぶやきには一向きき耳もたてなかったし、単に耳に入れているという様子もみえなかった。

若い女は相変らず、丸くにぎった両手のかげにかくしたパンを一生けん命にかじったり、むしったりしていたが、彼らのことは、まるで耳のきこえない人のように、余念なく冷淡にじっと見ていた。「きさまがここまでわざわざ見にくきたこのくそ野郎どもに、だれかが戦争をやめたか、きいてみるといいさ」

「それも分っています」とその男は答えた。「ただそういっただけのことです。私の書類を見られたでしょう」

「憲兵隊長の副官も見ろだろう」と軍曹はいった、そしてその男ではなくて、軍曹自身が体をひるがえして向き直ったが、その手にはもみくちやになった書類をつかみ、こんどは肘と手と両方をつかつて街路にかえる通路を開こうとした。それからまた急に立ちどまって頭をぐいとあげ、そして人々が彼に注視した時、彼は群集の頭や顔をこえて古城門の方角を見るために全身をもちあげたようであった。つぎに人々はある音を耳にした。すでに銃剣の列の下をもぐって行った軍曹ばかりではなく、その若い女でさえその音に耳をたて、彼女は梶のようにまるくした両手のかげでパンをかむのをやめて耳をすまし、この時群集の頭も押し合っている体も一つになって、彼女から街路へとそらさ